

頻用される下剤の種類と特徴

常用しても癖にならない下剤の代表は「マグネシウム」製剤です。これは腸管には全く刺激がなく(いくら服用してもお腹が痛くならない)、作用としてはただ便を軟らかくするだけです。マグネシウムは服用した場合そのほとんどが大便とともに排出されてしまい、わずかに吸収されたマグネシウムイオンはむしろ人体に有益とさえ言われています。高度の腎臓機能障害などごく一部の疾患を除けば安全に長期間使用できる下剤であり、服用しながら妊娠・出産・授乳されても全く問題はありません。また小児にも安全に使用することができます。漢方や生薬下剤と異なり、常用しているうち量を増やさないと効かなくなるようなことは絶対にありません。

また下剤には分類されませんが、「ガスモチン[®]」や「ガナトン[®]」などの消化管運動賦活剤も習慣性に乏しいと考えられます。

一方、最も習慣性が強い、すなわちクセになりやすい下剤がアロエ、センナ、ダイオウに代表される生薬・漢方系下剤です。市販薬でよく宣伝されており手軽に入手しやすい、飲みやすいこともあり、これらを常用されている方を非常によくお見受けするのですが、それは大変悲しいことです。アロエ、センナ、ダイオウに含まれる下剤成分は基本的に同一のものであり、また剤型が錠剤でも煎じ薬でもお茶でも作用物質は全く変わりありません。これらは大腸を強烈に刺激して蠕動運動を起こさせ排便を促すもので、確かに最初のうちはよく効きますが、長期間の連用により容易にしかも確実に常習化をもたらします。すなわち、だんだん効かなくなってくるために服用量が次第に増加し、大腸粘膜の黒色化を来し大腸の筋層が薄くなってしまい、遂には全く張りのない紙風船のような真っ黒でペラペラの大腸になってしまいます。それとともに下剤を飲まないとお腹が張って苦しくなるという症状が現れ始め、重度の「刺激性下剤中毒」になりますとしまいには腸管運動が極端に低下して「麻痺性腸閉塞」に陥る場合すらあります。「アロエなど自然界に存在するものは人体に害を及ぼさず常用でき、化学合成した薬物は常用しない方がよい」などという観念は全くの誤りです。